

5 2 【やまながれ】

大雨の夜、完ちゃんの家が、【やまながれ】にやられたとききました。

はじめ、甲虫の臭いがしたという。

それから土の臭いがして、ものすごい音がきこえたという。

怪獣の声に似ていたという。

がおう

がおう

ごうん

ごうん

そして、【やまながれ】が来たのです。

幸い家族は無事だったけれども、完ちゃんのお祖母は家といっしょに、中山の中腹から中川まで流されたとのこと。

「あの婆ちゃんは、不死身じゃのう」

「あの婆ちゃんは、おばけじゃ」

「あの婆ちゃんは、【やまながれ】の魂魄（こんぱく）かもしれん」

なんて噂が、もう村中に流れていました。

「【やまながれ】たあ、なんじゃ」

ぼくは懐爺にききました。

「〈やまながれ〉ともいいますがね。江戸時代には、【やまぬけ】とか【じゃぬけ】といったそうです。台風とか大雨が来ると、【やまながれ】は元気がでて、山から流れだすんですよ。完ちゃん一家は不幸中の幸いで、いままで【やまながれ】にやられて、行方不明になった一家もずいぶんいるんですよ」

「ゆくえふめいか、ふめいはいいのう」

ぼくは本音をいいました。

「不明はいいですかね」

懐爺は笑っていいました。

「ふめいは、おばけじゃからのう」

「なるほど。不明なら、無理して探さなくてもいいわけですね」

「さがして、そうしきするんか」

「やっぱり葬式ですね。それからお墓」

「つまらんのう。わしがふめいになったら、さがさんでくれ」
強い口調でぼくはいいました。

「わたしも行方不明になったら、絶対に探さないでください」
懐爺もめずらしく、強い口調でいいました。
ぼくは肯きました。

「かんちゃんのうちは、なんでやまのなかにあるんじゃ」
ぼくは前々からの疑問をぶつけました。

【やまながれ】にやられたからではなく、遊びに行ったり来たりが大変だからそういったのです。

「家が山の中にあっちゃいけませんか」
「いかんいかん。だから、【やまながれ】にやられる」
ぼくは口を尖（とが）らせました。

完ちゃん一家に、文句をつける気分でした。

「山の上には神様がおるんです。だから神様を大切にする人たちは、山の上に近いところに住むんですよ。完ちゃんのお婆さんは、神様を大切にしていましたからねえ」

「そんなら、やまのうえにすめばええ」
もうぼくは面倒臭くなっていました。

「上まで行っては神様に失礼ですから、ほどほどに中腹で。こういう考えを昔から、〈中庸〉といいます」

「ちゅうよう、ちゅうか。ちゅうよう、ちゅうか」
ぼくはわけもなく、感心しました。

「人間はときどき、神様をおこらすことをやらかしますから、すると台風になったり大雨になったり、それで【やまながれ】になったり」
懐爺は口ごもりました。

「【やまながれ】は、かみさまのしわざかい」

「結果的にはそういうことになります」

「かみさまとおばけは、なかまかい」

「結果的にはそういうことになります。だから【やまながれ】に逢っても、完ちゃんのお婆さんは、神様の思し召しと、逃げたりなんかしないんです」

懐爺はなぜか、深い溜息をつきました。

「わしだったら、にげるのう。かみもほとけもあるもんか」

「それはお母さんの口癖ですか」

「しんだおとんのくちぐせじゃと、おかんがいつとった」

なぜかぼくも、溜息をつきたくなりました。

「それは神様も仏様も信じている人の言葉です。よっぽど辛いので、神様や仏様に、恨み言をいったんですよ。信じていなければ恨み言をいったりできません。両親にだって、先生にだって、天皇陛下にだって、恨み言をいう人は、信じているからなんですよ」

「もうええ」

ぼくは止めました。

懐爺がますます、理屈っぽくなっていきそうだったからです。

「わしがうらみごとというのは、かいじいだけじゃ」

「そんな嬉しいことをいつてくれるのは、金ちゃんだけですよ」

本当にうれしそうに、懐爺は笑いました。

もしかすると、この懐爺のこの笑顔をみたくて、この祠にくるのかもしれない。

そんなことをつと、ぼくはかんがえたりしていました。